

「子ども室」設計に親子間ギャップ、イケアから研究

2013/01/21

世界最大の家具専門店、イケアの日本法人であるイケア・ジャパンは1月10日、「子ども室」に関する東京電機大学、日本大学、芝浦工業大学との共同研究の中間発表会を開いた。研究の中で、子どもたちはリビングなどで遊びや勉強を日常的に行い、子ども室はモノを置くための場所になっていることが明らかになった。また、子ども室の家具配置のワークショップでは、親と子の空間構成に明らかな相違がみられた。



⊕ クリックで拡大

会場に展示された小学生の子どもによる家具配置の例。壁際に勉強机やベッドを、部屋の中央にローテーブルを置いている（写真：橘 晶子）



⊕ クリックで拡大

小学生をもつ親による家具配置の例。家具を壁際に寄せ、部屋の中央に空間を空けている（写真：橘 晶子）

同社は2010年9月、子どもにとって快適な環境づくりを目的に、「子ども室プロジェクト」を3大学とともに立ち上げた。心身ともに発達が目覚ましい小学生の1年生から6年生を対象に、子ども自身が落ち着ける子ども室や、子どものための空間のあり方について研究を進めてきた。

経過報告をパネルディスカッションでの発言も含めてレポートする。発表者は、日本大学理工学部の本杉省三教授、芝浦工業大学工学部の清水郁郎准教授、東京電機大学理工学部の勝又洋子教授。パネルディスカッションでは、3氏のほか、イケア・ジャパンインテリアデザイナーの竹川倫恵子氏が登壇し、子育てアドバイザーの高祖常子氏がコーディネーターを務めた。



⊕ クリックで拡大

研究発表で行われたパネルディスカッションの様子（写真：橘 晶子）

かつて客間だった和室は リビングとともに遊び場に

本杉教授はまず、住宅と子ども室のあり方について歴史的に考察した。大正期ごろから洋風で2階建ての住まいが増加するのに伴い、2階に子ども室を設置する家庭が増えてきたと分析。さらに、親の教育意識が住まいのイメージにも影響を与え、「子ども室＝勉強の場」との考えが浸透してきたという。

現在は、廊下を介さずにリビングとダイニング、和室などがつながるワンルームのような空間を持つ住まいが主流になった。昔は客間として使われていた和室は、今ではリビングとともに家族が集う場、子どもの遊び場になっている、と本杉氏は指摘。LDKと隣接する和室の一体利用について、「家族同士の様子が分かり、互いの気配を感じやすいので、安心感が得られるから」と分析している。

子ども室で宿題をする女子は少ない 宿題をする場所は男女とも居間

本杉研究室は、日本大学の駿河台（東京・千代田区）と郡山（福島県）、2つのキャンパスの学生合計180人を対象に、自分が育った住まいと子ども室に関する調査を実施した。駿河台キャンパスの学生の大半は東京、神奈川、千葉などの首都圏で、郡山キャンパスの学生は福島県が4割、群馬や宮城などの近県で子ども時代を過ごしている。

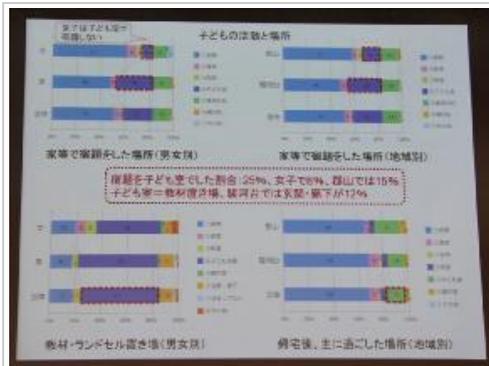
まず、放課後過ごした場所を男女別にみると、男子は友達の家（28%）が最も多く、次いで、公園（21%）、自宅（18%）の順であるのに対し、女子は自宅（27%）、公園（21%）、友達の家（16%）、クラブ・習い事（16%）の順だった。

男女差は、家で宿題をした場所にも見られた。男子は居間（48%）、子ども室（30%）、食卓（5%）の順だが、女子は居間（61%）、専用の机（13%）、食卓（8%）、子ども室（8%）と、子ども室で宿題をする女子は男子に比べて少なかった。

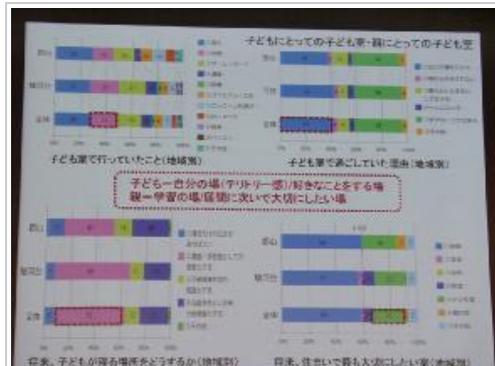
教材、ランドセルの置き場について、全体の6割が子ども室と答えている。帰宅後に主に過ごした場所は、居間が全体で68%と圧倒的に多く、子ども室が15%、食卓が7%だった。



🔍 クリックで拡大
日本大学理工学部の本杉省三教授。パネルディスカッションでは、「自分たちの生活スタイルや地域との関係性から子どもの空間を考えて、建築家に住まいの設計を頼む人が増えている」と語った（写真：橋 晶子）



🔍 クリックで拡大
家で宿題をした場所、教材・ランドセルの置き場、帰宅後、主に過ごした場所に関する調査結果。子ども室で宿題をする割合は郡山で15%、駿河台で29%と地域差が見られる（資料：本杉省三教授）



🔍 クリックで拡大
子ども室で行っていたこと、子ども室で過ごしていた理由、将来、子どもが寝る場所をどうするか、将来、住まいで最も大切にしたい室についての調査結果。学生たちは、将来親になったら、居間に次いで子ども室を大切にしたいと答えている（資料：本杉省三教授）

子ども室で行ったことは、寝る（28%）、宿題（21%）、ゲーム・カード（19%）の順となった。子ども室で過ごした理由については、「自分の場所だから」が41%、

「好きなことができるから」が38%だった。

かくれんぼと鬼ごっこができる住まいが理想 建築家が考える子ども室を調査

本杉教授はさらに、建築家が考える子ども室について調査した。雑誌「住宅特集」に掲載された子ども室のタイプを、10年前と現在で比較。10年前は個室タイプの子どもの室が6割、非個室タイプが4割だったのに対し、現在は個室タイプが4割、非個室タイプが6割と逆転していた。

この結果に基づいて、非個室タイプの子どもの室を持つ家庭を訪問調査した。子どもの室はガラスやカーテンなどによって仕切られているが、完全に閉ざされてはおらず、家族の過ごす空間とつながっていたという。

子どもにとって理想的な住まいは、「かくれんぼと鬼ごっこができる空間」だ、と本杉教授は主張する。つまり、自分の居場所がある「縄張り感」と、居間などにつながる「広がり感」のある空間で、家族皆がいる、あるいは皆がいると感じられることが重要だという。

また、開くと書斎のようになる開閉式の机を廊下に設置していた住宅を例に、「親も家族とつながりながら、一人になれる空間が必要なのではないか」と語った。

芝浦工業大学工学部の清水郁郎准教授の講演

L、D、Kに沿った機能分化はない リビングで遊びや学習、着替えをする子どもたち

清水准教授は、「居住空間とモノから見る子どもの様態」をテーマに研究をしている。10年8月から11月にかけて、東京都江東区の豊洲地域を中心とする小学生がいる住まい13戸を対象に、住宅平面の実測、物品調査、居住者へのインタビューを実施した。1戸の平均延べ床面積は76.76m²で、1世帯の構成人数は4人だ。

調査の結果、リビングでは学校の準備や着替え、学習、遊び、読書など多くの個人的行為が行われ、それに応じてオモチャや趣味のモノ、本など、多くのモノが持ち込まれていることが分かった。また、LDKは子どもだけでなく、家族全員が集まる場でもある。母親の家事室となり、父親も家にいるときは、ほぼリビングで過ごしている。

ある事例を見ると、学校から帰宅した子どもが子どもの室にいるのは、ほんの一瞬だけ。ランドセルなどの荷物を投げだすとリビングに直行し、リビングとその隣接室で過ごしていた。この事例では、子どもの室で就寝しておらず、家族全員がリビングの隣接室で就寝していた。



＋クリックで拡大
芝浦工業大学工学部の清水郁郎准教授。「調査を通じ、限られた居住空間に対してモノが多すぎると感じた。リビングから押し出されたモノをある居室に押し込み、そこに父親まで押し込んでいる（笑）ようにも思える」と語った。（写真：橋晶子）



＋クリックで拡大
調査した小学生がいる住まいの間取りと帰宅後の子どもの行動。赤い矢印が子どもの動線で、帰宅



＋クリックで拡大
LDKで行われる行為の例。ダイニングテーブル隣のリビングセットで、子どもは勉強する。リビ

後、子ども室に入って荷物を置くと、すぐにリビングに向かっている（資料：清水郁郎准教授）

グ中央の子どもが遊ぶスペースで、父親は帰宅後に寝ながらテレビを見て、くつろいでいる（資料：清水郁郎准教授）

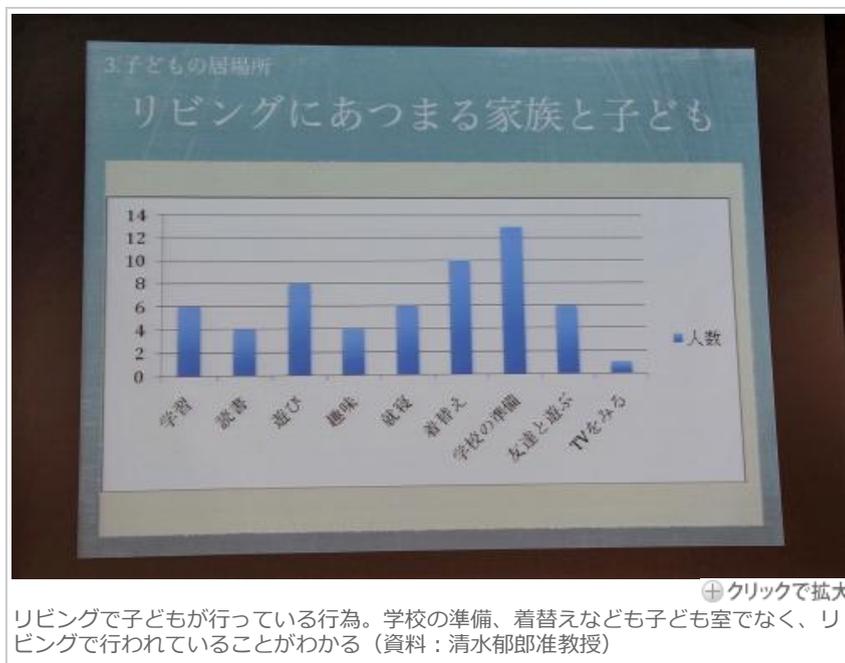
LDKの隣接室はリビングの延長とみなされる傾向にある。子どもの遊び場や家事室となり、ときにはテレビの視聴や昼寝などくつろぎの空間となっているケースも多いという。LDKの隣接室で6事例が就寝し、3事例が子どもの空間として使われていた。

清水准教授は「LDKは、食事をつくって食べ、くつろぐだけではなく、さまざまな行為とモノが並存する場。建築する側の思いどおりには使われていない」と主張する。L (iving)、D (ining)、K (itchen) に従った機能分化はほぼ見られず、家族それぞれの多様な行為を受容する柔軟性を持った空間であると解説した。

「パパの部屋」はモノ置き場？ LDK空間は改善の余地あり

リビングが子どもの居場所となっている一方で、子ども室は趣味のモノや好きなモノ、自分の持ち物を置いておく場になっている。

面白いのは「パパの部屋」の実態だ。13事例中5事例に「父親の部屋」とする居室があったが、4事例はその部屋がモノ置き場となっていたという。また、母親のための個人室は事例がなく、代わりに母親はリビングでパソコン作業などを日常的に行っているケースもあった。



これらの調査を通じ、住まいに収納が少ないのに対して、モノが非常に多いと感じた、と清水准教授は語る。しかし、居住者は多くのモノがリビングに集まっていることについて、特に問題意識を感じていないように見受けられたという。

「空間をうまく使いこなしているようだが、配置や空間の使い方には改善の余地がある。モノがむき出しのままのところが多いので、それらを収めるスペースをつくるか、廃棄することも必要。また、LDKの空間配置そのものが理想的でないので、耐震壁だけ残して壁を取り払い、空間を作り変えてもよい」と、提言した。

東京電機大学理工学の勝又洋子部教授の講演

子どもは中央にローテーブルを配置 親は家具を壁際に寄せて部屋の中央に空間を

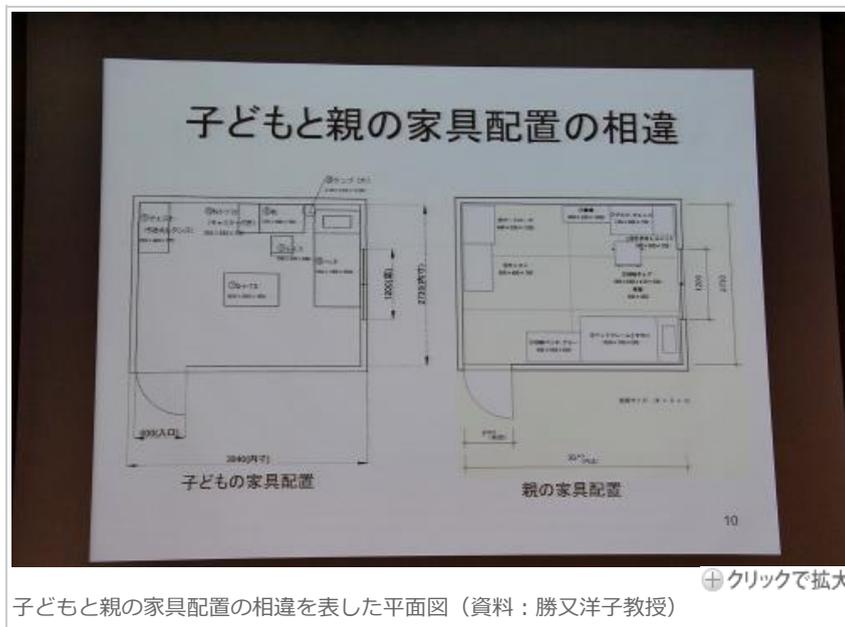
勝又洋子研究室は、小学生とその親に子ども室の家具を配置してもらったワークショップを実施した。参加したのは9組の親子だ。家具はイケア・ジャパンの提供によるもので、色の好みによる影響が出ないように、白いものだけに限定している。子ども室の広さは、2.6m×3.5m×2.4mの6畳。家具配置の後、空間の利用法や落ち着きなどを聞き取り調査を行った。

ワークショップの結果、親は家具を壁際に寄せ、部屋の中央部に空間を空ける傾向があった。一方、子どもは家具を必ずしも壁際に寄せず、ローテーブルを部屋の中央に置いたという。「子どもの空間構成は、ここで勉強する、読書する、談話するなどの目的が明確に分かる。しかし、大人の家具配置には、中央に空けたスペースで何をするかなどの具体的な行為が見えてこない」と勝又教授は指摘した。



🔍 クリックで拡大

東京電機大学理工学部の勝又洋子教授。「小学校低学年では体の大きさとの関係から、6畳の子ども室では落ち着かない。小学生とひとくくりで考えずに、成長に合わせて子どもの目線で考えることで、子どもにとって快適な環境をつくることができる」と提言する（写真：橋 晶子）



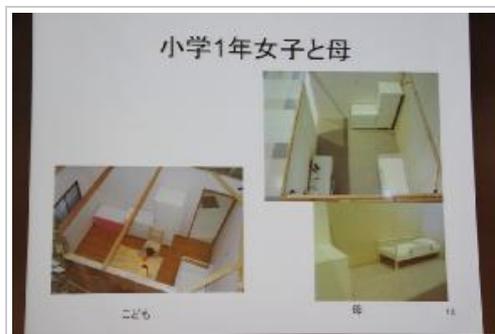
🔍 クリックで拡大

子どもと親の家具配置の相違を表した平面図（資料：勝又洋子教授）

高学年の子どもに、勉強に集中したいという理由から、ベッドの隣に机とキャスター付き引き出しを配置した事例があった。小学5年生の男子は窓際にベッドを置き、隣に勉強机を配置した。理由は「勉強で疲れたら、ベッドで休むから」。部屋の中央にローテーブルを置いたのは、友達と一緒に遊んだり、趣味や読書をするためだと答えている。

「小学生とひとくちにいても、低学年と高学年とでは子ども室に求めることに相違がある」と勝又教授は言う。低学年の家具配置では、部屋の中央に木製テーブルを置く事例がいくつか見られた。自宅のリビング空間を模してテーブルを置いたと推測されるが、実際、聞き取り調査でも「普段、リビングで勉強し、遊んでいる」と答えたという。

さらに、子どもの落ち着き度や集中力を、親、子それぞれがつくって空間で比較。子ども自身が作った部屋にいるときのほうが、落ち着き、集中力が増すことが分かった。自分のつくった空間に短時間滞在してもらおうと、ベッドで眠ってしまった子どももいたという。



小学1年生の女子（左側）とその母による家具配置。子どもは部屋の中央に木製テーブルを置いている（資料：勝又洋子教授）



小学5年生の男子（左側）とその母による家具配置。男子は家具を配置したあと、自分のつくった空間に落ち着きを感じ、ベッドで眠ってしまった（資料：勝又洋子教授）

低学年に6畳の子ども室は広すぎる 成長に合わせた空間づくりを

子どもの体格差も子ども室に対する思考に大きな影響を与える。「6畳の部屋は、大人ならさして広いと感じないが、小学1、2年生には大人の倍くらいの広さに見える」と勝又教授。小学2年生の女子は、室内に多くの家具を配置することによって、自分の手の届く範囲の空間をつくっていたという。

勝又教授はさらに、小学校入学時期に机や椅子をそろえて、中学や高校まで使用するという傾向にも疑問を投げかける。

「小学校低学年には子ども室は必要ないのではないか。学年が上がったらリビングに子どものコーナーを作ってやる、高学年になったら子ども室をつくるなど、成長に合わせて子どもの空間を考えるべき。子ども室が広すぎるようなら、部屋を区切るなど、可変的に使用するのもよい」と提言した。

橋 晶子=フリーライター [ケンブラッツ]

日経BP社

©1999-2013 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

このサイトに掲載している記事、写真、図表などの無断転載を禁じます。著作権は日経BP社またはその情報提供者に帰属します。掲載している情報は記事執筆時点のものであります。